総合教育会議
資　料

資料１　平成 30 年度第２回（通算第４回）　・・・・・・・・・ 1
学校再編検討会議　意見・提言等のまとめ

資料２　子どもの学び・小中一貫教育について　・・・・・・・・・2

資料３　三木市の学校再編のイメージ　・・・・・・・4

平成 30 年 12 月 25 日

資料１

平成30年度第２回（通算第４回）三木市学校再編検討会議
意見・提言等のまとめ

1　喫緊の課題の志染中学校、星陽中学校については、スピード感をもって進める。それぞれの「統合先」については地域と意見交換をしながら進める。
①志染中学校の場合、緑が丘中学校か自由が丘中学校という統合案に加えて、行きたい学校を選択する方法も検討する。
②星陽中学校の場合、口吉川小学校と豊地小学校があるので、それぞれの地域の意見を勘案しながら検討する。
③段階的な統合（学年ごとの移行）は可能であるか検討する。

2　吉川４小学校の統合については、現状での教室数を考えると、みなぎ台小学校が妥当と考えられる。

3　子どもの成長度合いや地域コミュニティーとの関係から、小学校も喫緊の課題ではあるが、小学校と中学校は取組の早さを分けて考える。志染小学校、口吉川小学校、豊地小学校は、中学校の動向がはっきりしないと決めかねるため、喫緊の中学校の課題を先に取り組むこととする。

4　状況に応じて中学校及び小学校を統合し、小中一貫校に再編の後、義務教育学校に再編していく流れは、違和感が無く、国としても進めているところである。

5　全体像については、地域や保護者の方が、どの学校とどの学校が統合するのかという、より考えが深められる具体案をいくつか作成すること。その上で内容を説明し、意見交換する。また、意見として出た小学校低学年だけを分校として残す方法も検討する。

6　通学方法について、費用負担のあり方、バスだけではなくタクシーなど、多様な通学方法について研究する。しかしながら、徒歩や自転車による子どもの体力面の増進や授業前の心と身体のウォームアップ効果による学習効果も含めて研究する。
　地域の実態に応じた選択をしていくため、地域の意見をお聴きしながら通学方法を検討する。

資料２

１　子どもに求められる学びとは

子どもが生きていく未来は、急激な社会の変化が予想されています。技術革新などは、人々の生活を豊かなものにする可能性がある一方、変化に戸惑うことも考えられます。子どもが生きる未来を見据え、今、付けるべき力を明らかにし、学びの場を整えることは、我々大人の大きな使命であると考えます。

学校では、一定規模の集団の中で、自分なりの考えを持ち、多様な人々や意見に触れ合いながら学ぶことが大切です。

求められる学び

主体的・対話的で深い学び

○これまでに自分が学んだことを振り返り、次につなげようとする「主体的な学び」

○子ども同士、教員、地域の人との対話などを通じ、自分の考えを広げようとする「対話的な学び」

○知識を相互に関連付け理解し、必要な情報を精査して考えを形成し、問題の解決策を見出し、思いや考えを基に新たな価値を創造しようとする「深い学び」

「自分自身で深く思考する学び」と「グループや学級での協働的な学び 」を相互に関連付けながら、他者と共に課題を解決していくための力を育成することが求められている。

付けるべき力

【学びに向かう力・人間性等】
社会・世界と関わりながら、より良い人生を切り拓くための力

【思考力・判断力・表現力等】
理解していること・できることを上手く、使いこなすための力

【知識・技能】
何を理解しているか、何ができるのか（基礎・基本的な力）

子どもが生きる未来

○情報化やグローバル化などが人間の予測を超えて進展
○少子高齢化がさらに進む

急激な社会の変化
複雑で予測が困難

【人間が持つ力】
「豊かな感性」「前向きさ」「考える力」「思いやり」等を持って、多様な人と協働しながら、困難な課題に対して、納得できる答えを導き出す。

「学習指導要領」「2030年の社会と子どもたちの未来」（文部科学省）から抜粋

2　小中一貫教育について

小学校と中学校での学びは、それぞれの段階で完結するものではありません。小学校の教員は、中学校での学習や卒業するときの姿をイメージしながら、また、中学校の教員は、小学校のどの段階で何を学び、何につまずいたりして、今の姿があるのかを知った上で指導する必要があります。小中一貫教育では、これらのことを念頭に、９年間にわたって子どもを見守り、心と体そして学力の大きな伸張を目的として行われるものです。

小中一貫教育が求められる背景・理由

学習活動の質的充実

小学校高学年での専門的な指導や、児童生徒がつまずきやすい学習内容について、きめ細やかな指導などの学習指導の工夫を長期的な視点で、小学校と中学校の教員が連携する必要性がある。

発達の早期化への対応

６－３制の大きな枠組みを維持しつつ、４－３－２などの学年段階の区切りを柔軟に行うことで、心身の発達の変化に対応し、小学校と中学校の教員が連携して学習意欲の向上や個性伸長を図る。

中1ギャップへの対応

小から中への進学に際し、新しい環境での学習や生活に不適応を起こす、いわゆる「中１ギャップ」への効果的な対応を図る。

適度な段差は、教育効果もあるため、意図的に適切な移行を図る。

社会性育成機能の強化

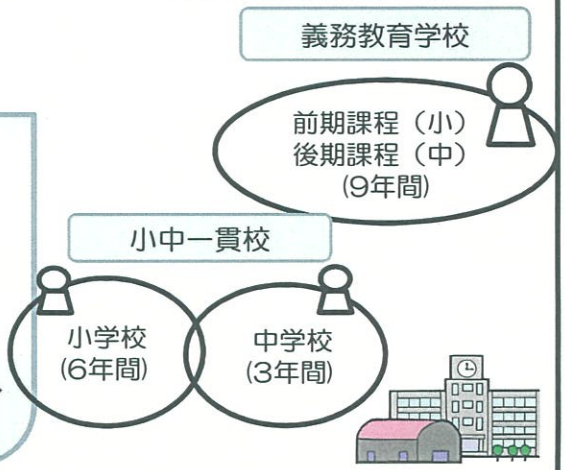
地域での集団遊びや年齢の離れた子ども同士の関わり、大人とのコミュニケーションが減っている。家庭や地域の役割は引き続き重要で、学校が全てを担うことは不可能だが、子どもたちの集団教育の場である学校の役割への期待は相対的に大きくなっている。

小中一貫教育の特徴

・めざす子どもの姿を共有し、９年間を通じた教育課程（教育内容、方法を含んだ教育の全体計画）を編成し、つながりのある教育を行うことができる。

・４－３－２など、柔軟に学年段階を区切り、学習活動、行事を通じて異学年交流行うことで、効果的かつ系統的に社会性や学力などを伸ばすことができる。

・三木市では、同じ敷地に小学校と中学校を置く一体型の小中一貫校を設置し、より効果の高い義務教育学校への発展を目指している。

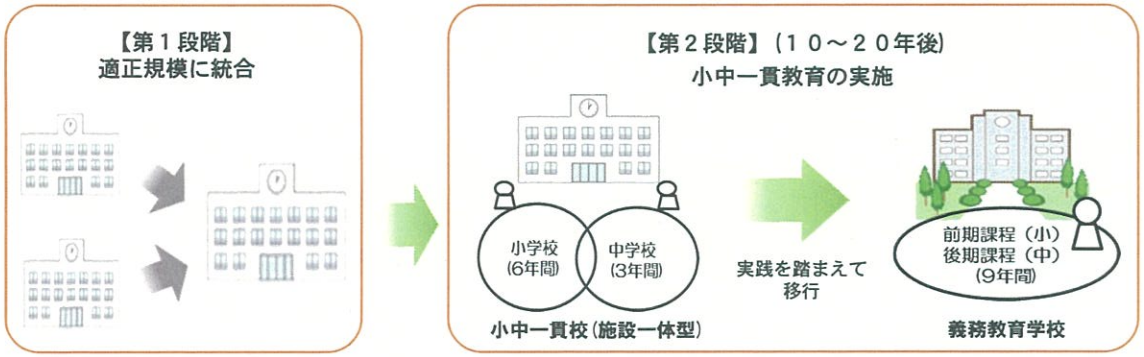


資料３

三木市の学校再編のイメージ

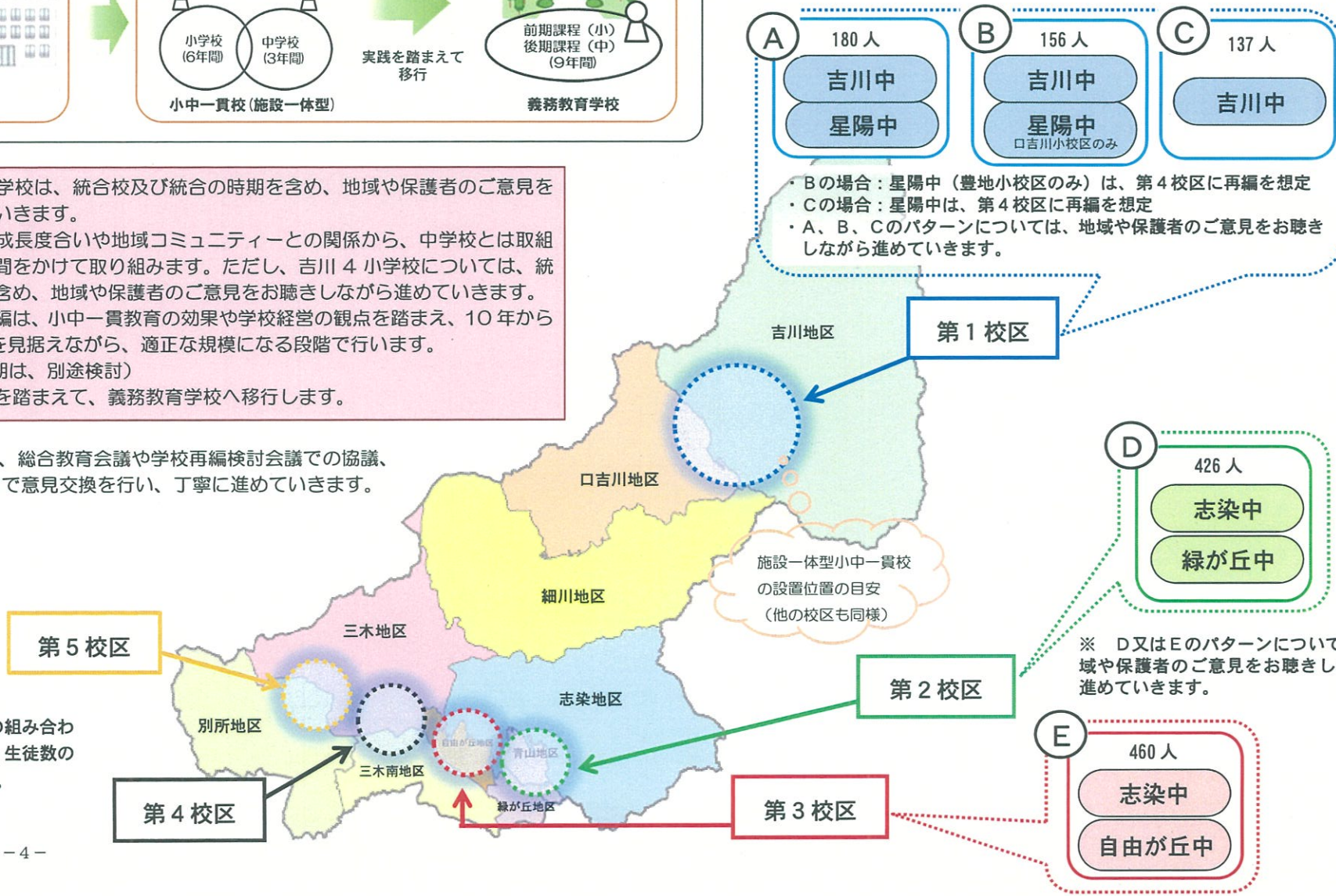
２０１８．１２　三木市教育委員会

イメージ図



① 志染中学校、星陽中学校は、統合校及び統合の時期を含め、地域や保護者のご意見をお聴きしながら進めていきます。
② 小学校は、子どもの成長度合いや地域コミュニティーとの関係から、中学校とは取組時期を分けて考え、時間をかけて取り組みます。ただし、吉川４小学校については、統合校及び統合の時期を含め、地域や保護者のご意見をお聴きしながら進めていきます。
③ 小中一貫校等への再編は、小中一貫教育の効果や学校経営の観点を踏まえ、10年から20年後の子どもの数を見据えながら、適正な規模になる段階で行います。
（第１校区の再編時期は、別途検討）
④ 小中一貫校での実践を踏まえて、義務教育学校へ移行します。

※ 上記①～④を踏まえ、総合教育会議や学校再編検討会議での協議、地域部会、説明会などで意見交換を行い、丁寧に進めていきます。

※ 第４・第５校区の学校の組み合わせについては、今後の児童・生徒数の動向を勘案して検討します。

５校区のイメージ
① 三木市の東部に位置する校区から順番に、仮に第１校区から第５校区としています。
② 点線で示した円は、児童・生徒数の状況を考え、施設一体型小中一貫校を設置する位置の目安を示しています。
③ 人数は、現在中学校に在籍している生徒数(H30.5.1 現在)